

手記

北鮮・ウラジオストックの思い出

石川県 村沢 藤作

はじめに

昭和十年徴集で第二乙種、そして第一補充兵役に編入、これが私の軍歴の始まりである。

昭和十二年七月、支那事変が勃発したが、私は翌十三年五月、早くも召集令状を受けて金沢の歩兵第七連隊補充隊に入隊。三カ月の教育が終わるや否や中支へ出征することになったが、事前の身体検査ではねられて入院、退院後も隊に残された。

翌十四年六月、本隊の第九師団が中支から復員し、

私たちも召集解除となって帰郷した。突然の朗報で、飛ぶように営門を出たものである。

それから二年後に二回目の召集。秘密裡に出発して海を渡り、到着した所は第九師団が駐屯する満州牡丹江郊外、掖河の歩兵七連隊であった。ここに三年いるうち、大東亜戦争も守勢に入った十九年六月、師団は南方増強で台湾に移動したが、私はその一週間前、東満国境に分遣され、新設部隊の一員となった。二十年四月、部隊は移動して南朝鮮の慶尚南道泗川付近で陣地構築に汗を流していたのである。

運命の日、八月十五日

我が大隊（歩兵第二六一連隊第一大隊）は七月下旬、慶尚南道晋州に集結し、ある小学校を宿舎にした。八月九日、ソ連軍参戦の報を受けて急ぎ北上することに

なった。十四日、私は公用で普州の街へ出た。あちこちの電柱に「十五日正午重大発表あり、一億これを聞け」という文面のビラが貼られていた。私は一億総動員令の下令だろうと思っていた。

十五日当日、使役に出ていた兵隊が作業中止になって帰ってきて、日本が敗けたらしいと言うので大騒ぎになった。夕方、私も駅まで行ってみた。街のあちこちにデンデン太鼓のような図柄の旗が立っている。後で聞いたら朝鮮の旗であった。民家の脇に立ってかすかに聞こえるラジオを聞いた。ちょうど、鈴木首相の談話であった。

敗戦は本当だった。とめどなく涙が流れた。洛東江に映す月影の碎け流れる様は、あたかも我が前途の苦難を暗示するように感じられたことを覚えている。

八月十九日、的確な命令もないまま、私たちは北へ向かって出発した。途中頻繁に南下する避難列車とすれ違った。部隊もあった。戦いが終わったというのに何故我々だけが北上するのか。投げ込まれた新聞で、敗戦の詔書の全文を知った。

京城近くの永登浦にまる一日停車した。大隊長は軍司令部へ連絡に行ったが、的確な指示も得られなかったという話。私たちはすべてから見放された孤児のようない気持ちになった。

線路近くの鉄道官舎へ行き、炊飯をお願いした。「私ももう帰国でしょう」と、一羽しかない鶏をしめて馳走してくれた。涙の出るほど嬉しかった。ご一家は無事に帰られただろうか。手を振って別れたあの日のことは忘れられない。

武装解除・三合里収容所

私たちは再び乗車、北上を開始した。すれ違う避難列車は地獄列車だ。無蓋貨車にすし詰め、酷暑の中を食もなく水もなく、用便さえままならぬ状態で南下して行く哀れさ。見るに見かねて乾パンの二、三袋を投げ込んだが、狂気のように飛びつく姿にはただ涙であった。

平壤に着いて連隊長と連絡がつき、居留民保護のために新義州へ行けとのことで、着いたのは八月二十二日だった。

新義州の街はまだ平穩であった。女学校に宿営して、鴨綠江で水浴びを試みる愉快な一時もあった。

二十四日、ソ連兵が侵攻してきた。

武装解除。私たちはこの言葉を使わず、兵器返納と称した。小銃に刻まれた御紋章をヤスリで消したが、涙の止めようがなかった。軍紀も弛緩してきて、毛布など現地人と交換する手合いも出てきた。鶏を一羽抱えた鮮服の男が、馬と交換しないかと言ってきたのは驚いた。

私たちは一応召集解除ということになり、即日、朝鮮特別警察隊に採用して、月俸四十五円を給するという辞令を知らされ、警察署長も来て一場の歓迎の辞もあった。しかし、それも空振りに終わった。

だれもが進退窮すという気持ちで、学校の廊下を行きつ戻りつするばかり。離隊して単独行動する者も出てきた。私の分隊の朝鮮出身の大村鐘業君（日本名）は最後まで私たちと行動を共にしてくれ、私たちが南下するとき別れたが、無事帰郷したのだろうか。

ここの道立病院の院長さんが石川県出身だと聞いて

訪ねた。「心配するな、一緒に住もうよ」と背広まで一着くださった。それではいったん部隊に帰って後始末してきますと帰隊したが、禁足令が出て間もなく出発ということになって、連絡もできずに新義州を後にしたが、杉山院長一家には申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

九月二日、平壤の船橋里に下車した。希望を失くしてトボトボ歩む足の重さよ。飛行機の残骸を横に見、赤い腕章をして威張り散らす朝鮮人に叩頭して指示に従わねばならぬ情けなさ。関東軍を罵倒する宣伝カーが往き来する道を追い立てられる。三合里近くの分かれ路で、下士官、兵は三合里へ、将校は弥勒堂方向へと分離される。

私たちの収容所は旧陸軍の三合里廠舎であった。いるわいるわ、兵隊が充満している。廠舎で足らず、露営する一群、馬房にも詰め込まれている。二、三万人いたのだろうか。

二、三日して若干名の将校が戻って来て、千名単位の大隊編成が出来上がった。我々は第十八大隊と称し、

大隊長は中津大尉、私は第三中隊で中隊長は越沼中尉である。

九月中旬から「東京ダモイ」といって、毎日、一個大隊ずつ出発していった。空きができて、我々も廠舎内へ入ることができた。それでも一個中隊（二五〇名）の建物に千名入ったので、半数以上は土間や床下に寝たのである。順番を待っていた「東京ダモイ」も中止だとのことで、出発準備も沙汰止みになってしまった。

我々は一体どうなるんだ、という気持ちが昂じて、逃亡する人も出てきた。しかし、現地人も既に敵人であると考えるとき、三十八度線を突破することは至難の業であつたろう。我が大隊からも一名の逃亡者が出て、大隊長はソ連側から拳銃を突きつけられて脅迫された。十月ごろ、二人の逃亡者がつかまって銃殺されたことがある。この時は見せしめのため、各大隊から数名の見学者を出させて、その面前で撃ち殺した。

十月下旬であつた。病弱者を送還するということが、数百名が出ていった。喜び勇んで収容所から去ったが、行き先は日本ではなく間島省の延吉の病院であつたと、

帰国後に聞いた。その連中の大半は帰国していない。出発時の携行糧秣は生の大豆であつたという。病弱者に生の大豆では死ねと言わんばかりである。

我々の日々の食糧は、ソ連軍が掠奪してきた米と、軍の乾燥野菜、乾燥味噌などであつた。初期は個人炊事、分隊炊事、大分経ってから大隊炊事になった。燃料も不足するばかりで、後にはソ連兵の引率で近くの山へ薪集めに行ったものである。

大隊内ではしばしば人員の入替えがあつた。徒党を組むことを何より警戒するためであらう。新顔が次々入ってくる。兵隊もいるが、民間人も数多く入ってきた。「使役に出てくれ」と男ばかり駆り集めて、そのまま収容所へ放り込んだのである。私の分隊へ沙里院の農事試験場の技師をしていた五十嵐胖氏や兼二浦の製鉄所にいた丹藤幹男という人も入ってきた。梶川義太郎、平山清義氏も入ってきた。梶川氏の話で忘れられないのは、些細な過ちを犯したある分隊員がソ連のゲーペーウに引つ張られ、ソ連のスパイになることを強要されて、止むなく書類に署名させられたというの

である。私は帰国してから復員局へ照会したが、その人の名は復員者名簿にも未復員者名簿にも見当たらないとの返事だった。偽名を使っていたのであろうか。

興南収容所

昭和二十一年一月三日、突然出発令が出た。持ち物といっても背負袋代用品と若干の日用品、それに飯盒だけという哀れな姿で、三合里を出たのは一月四日。京元線を走る我が貨車は、あちらに止まり、こちらに止まって、十時間ほどの道程を三、四日かかって興南に着いた。車中の毎日はシラミ潰しに明け暮れた。

興南では港の方へ行くと思いきや、再び収容所へ。そこは日本窒素株式会社の本宮工場の独身寮だった所である。六畳一間に十数人の割合で詰め込まれたが、「ダモイ」もすぐだと樂觀的な気持ちであった。

夜遅くソ連兵に引率されて使役に出る。「サジース」が座れということ、「スパーチ」が寝るということ、ロシア語も少しずつ覚えていった。

船の荷積み作業で興南の港へもよく行った。ソ連が洗いざらい掠奪した物資の積み込みである。収容所か

ら波止場まで三キロほどをトラックで運ばれる。腰に下げた飯盒は決して無駄でなく、米でも何でも実入りがあった。鍋や洗面器を持ってソ連兵の残飯もらいに集まる日本人。また時折、葬列にも出会ったが、遺体を毛布で包んだのは良い方で、菰に巻いて青竹にくくりつけて二人で担いで行く、などはただ無残で、言葉もない。

春ともなれば草も萌え、雲雀もさえずっている。

揚げ雲雀 とらわれの身は哀しくも

こんな句が浮かんできた。大空を飛び交う雲雀が羨ましかった。草を摘んで口に入れた。ヨモギの苦さもまた格別だった。少しはビタミンC欠乏症の補充にもなるだろう。

三月ごろ、私たちの建物から火を出して一棟丸焼けになった。原因は漏電だろうという。ヒューズ代わりに銅線をぶち込んだり、電線を引っ張り出してスパークさせて煙草の火を点けたりしていたのだから。

焼け出された私どもは近くの元疥癬病院へ移った。ここは戦時中、英兵の捕虜収容所でもあったというが、

部屋の壁に英国国旗が描いてあった。

シベリア

「トウキョウ ダモイ ハラシヨ」自動小銃を抱えた監視兵に前後を見張られて港に向かう。また「騙しやがる」と思いながら、あるいは？という気持ちにもなる。

夕暮れ、興南港を出た船は北に向いている。朝鮮の山並みが左舷にくっついて離れない。

翌朝、海軍の男が「ここは羅津沖だぜ」と叫んだ。いよいよシベリアだ！覚悟を決めたけれども不覚の涙が出る。

着いた所はソ連領ボセツトであった。二十キロほど歩いて露天の駅に着いた。草原の中に八錐形天幕が立てられて、兵隊が充満している。飯上げぐらいが用事で、大した作業もなかったが、熱い飯のかたまりが裸足の足の甲に落ち、そこが化膿してなかなか癒えず、復員後数カ月してやっと完治した。

一カ月ほどして、我々越沼中隊はウラジオストクへ送られることになった。ポンポン船のようなのに乗

せられて一日かかったが、上陸したのは七月十五日ころであった。波止場や街通りに日本兵を見受ける。元の日本領事館の前では、金色に輝く菊の御紋章が痛々しかった。アメリカの国旗の立つ建物もあった。炎天下を喘ぎ喘ぎ、ウラジオ港の見える丘にある収容所に着いた。第六収容所と言ひ、木造の二棟と大幕一つがあった。

朝夕はるか海を望みながら、この向こうに日本があるんだと思うと、たまらない気持ちになった。

ひながしの海に向かいて大声を

はしあげむかも 悲しい心

こんな歌が出た。ラーゲリの近くに、大正のシベリア出兵当時の浦塩派遣軍の碑があった。碑文に陸軍大將立花小一郎書とあった。三十年近く破壊されずに残っていたことは不思議でならなかった。恐らく敵愾心を強めるために保存したものでろう。とにかく日本人は異郷にみだりに神社や石碑を建てたがる悪い癖があった。

収容所の所長は鬼瓦のような顔をした悪相の男だっ

た。少佐だそうだ。経理担当の中尉は好人物だったが、作業係の将校は性悪の見本みたいな男で、よく「ダワイ」の代わりに「コマッタナ、コマッタナ」と言っているのを追いつてた。ある日だれかが彼らに對して「タワリシチ」と言ったらしい。タワリシチとは同志という意味で、君という意味でもある。これが鬼瓦所長の耳に入ってからたまらない。「お前らは同志ではない。軍事俘虜だ」ということで、毎朝夕の人員点呼後、号令練習よろしく「ガスバジン マイヨール」（少佐殿！！）と大声を出して練習したものである。

私がよく行った作業場所は「スタジオン」「ミンジンスカヤ」「ノボエドーム」「エンペーペーウ」そして「ポルト」であった。

「スタジオン」というのはグラウンド建設、「ミンジンスカヤ」はミンジン街の道路工事、「ノボエドーム」は新築建物工事、「エンペーペーウ」は地下防空壕のようで、海に面した所から奥深く通じた巨大な地下壕であった。

グラウンドの建設は主にトラック作りで、海草のよ

うなものを敷き詰めてから砂利を撒く作業で、三十日余り続いた。ミンジン街の道路工事は一面に石を敷き詰めて、間に土を詰めた。この作業中、側溝の中から日本の銅貨が沢山出てきた。シベリア出兵当時の物ではないだろうか。

一番喜ばれたのはポルト（港）の仕事で、船の荷役や倉庫の整理である。食える物がなにかと鶏の目鷹の目で塩魚・缶詰の倉庫とくれば大当たり。作業の往き来に小さい鉄片などを拾い、先端を尖らせて缶を破るのである。兵隊は実に器用なもので、どんなに検査が厳しくても工夫して持ち帰る。ソ連の兵隊も利口で、我々をそそのかして盗ませ、倉庫番を巧みに言いくづめて持ち帰らせ、収容所の手前で獲物の半分を取り上げるのである。

塩鮭も生のままで一本平らげようになる。塩漬けた肉を焼いて食ったら、翌日顔が麻痺してひん曲がったこともある。顔見合わせて苦笑するが、それでも止められない。空腹は苦しいものである。

あるとき、現場監督のゴルスキーという男、彼は囚

人で現場監督に来ていたのだが、気の良い男だった。

よく我々にタバコを無心にくる。「ソーロク ダワイ」と言う。ソーロクとは何だい、と聞き返すと、彼は棒切れを持って来て、四分の一の所を指して「ソーロク」だと言う。結局、四十だということが分かったが、こんなふうにしてロシア語の片言を覚えてきた。そのグロスキーがよくこんなことを言った。「パンを食ったら腹いっぱい水を飲め、腹がふくれるよ」と。我々は作業成績のことで、片言混じりに手真似足真似で話し合っし、監視の兵隊たちとも語り合っし。それで結構通じるものである。しかし、ロシア人相互の間では、(特に三人以上寄ったところでは) 口が堅く警戒的であつたように感じた。ひが目であろうか。

ウラジオストックも七月、八月という暑い日が続く。毎度のことながら人員点呼で立たされるのは一苦勞である。ある日の点呼で随分時間をくつたが、そのとき、突然目の前が真っ暗になって卒倒した。脳貧血を起こしたのだろう。「重いな、重いな」という声に正気づく、と、医務室に担ぎ込まれている途中であつた。

しばらく横になっていただけで回復したが、それからはこの女医さん、この男は虚弱体質と見たのだろうか、しばらく所内作業に回され、藥をさせてもらった。

昭和二十二年二月下旬だったろうか、我々若干名が船のラーゲルに転じた。ウラジオ埠頭に繋がれている船がラーゲルになっていた。船内にはスチームが通っていて、まさに極楽であつた。ここではどんな作業に出たかは覚えていないが、港の作業が主であつたようである。

四月十日ころ、ここから数十人が他へ転属することになった。虚弱者だから転地療養で健康を回復させ、日本へ帰すのだと言う。どこへ行くのだと聞いても知らぬ存ぜぬである。夕方、ウラジオ第二收容所だという所に一泊して、翌日の夕方汽車に乗った。あちこちから集まって人数も増えている。何事もあなたまかせ。翌朝だった。だれかが「オイ、ナホトカだぜ」と叫んだ。彼は以前、この付近のラーゲルにいたのだろうか。下車して徒歩数キロ、幕舎の收容所があつた。ナホトカ收容所である。

その暮舎から妙なメロディーが聞こえる。インターナショナルの歌であった。私たちウラジオ組の多くは、赤旗の歌もインターナショナルの歌も知らなかったのである。

民主グループ、アクチブと称する連中に威張り散らされ、戦々競々として待機すること一カ月余。五月十五日、接岸している米山丸に乗船することができて、ついに生きて帰ることができるのだという実感が涙とともに湧いてきた。

船内で初めての食事はぜんまいが入った雑炊だったが、米のうまさ、日本の飯に感謝するばかりであった。

【執筆者の紹介】

金沢市では、歴史の古い歩兵第七連隊の在籍者を初めとして、十幾つの陸海軍戦友会諸団体の交流、親睦が今も盛んである。

合同の慰霊祭や諸行事を行うほか、年刊の会誌『北陸戦友』（今年で21号）や『歩七の友』（今年で32号）などが発行されて、太平洋の孤島から朔北の地まで、

海から空まで、祖国のため国事のために青春の血と汗を流された戦士各位の心底に刻まれた秘話や実話、戦闘詳報や手記、日誌、あるいは戦死者、物故者の評伝、追悼文などが広汎に寄稿されて、読者をして襟を正させ、深い感銘を覚えさせる貴重な記録となっている。その戦友会の世話人、編集の第一人者として重宝がられている人が村沢さんである。

氏は、支那事変で一年、関特演から終戦まで四年と、兵隊の飯は丸五年も食われて、酸いも甘いも万事ご承知のベテランである上、戦後は北鮮から沿海州のウラジオストックと、強制抑留の憂き目もなめられた苦勞人である。

長年、社会保険労務士としての本業の傍ら、足まめ手まめで、公私にわたるまとめ役、世話役として欠かせぬ貴重な方である。

傘寿を越えられた今、ますますのご健勝を祈る次第である。

（石川県 永井 正三）